

ムラサキツヤハナムグリとミヤマオオハナムグリについて*

高橋 寿郎

ムラサキツヤハナムグリ *Protaetia cataphracta* Arrow, 1913 とミヤマオオハナムグリ *P. lugubris insperata* (Lewis, 1879) 2種のハナムグリは共にそれ程多くいる種ではないようである。

ムラサキツヤハナムグリの方は兵庫県下にも少ないながら分布しているが、ミヤマオオハナムグリの方はどうも西日本には分布してないのではないかと考えられている。そこで割合よく似ているこの2種の分布を中心とした報文を此処にまとめて見た。

ミヤマオオハナムグリ *Protatia lugubris insperata* (Lewis, 1879)

G. Lewis 氏により1879年に Hab. Yezo として *Cetonia insperata* として新種記載をされた (Ann. Mag. Nat. Hist. 5(IV):463). 同じ年同一著者による "Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago, London" の p.14 に No.1021, *Cetonia insperata* Lewis と収録されている。

さらに Lewis 氏は 1887年 "I took about thirty examples in Yezo. Vries Island, Chiuzenji, Nikko, Wada-toge are other localities for it" と本種に就いて記している (I.C., 19(5):198) (属名は *Cetonia*).

1887年 Schönfeldt, H.V. 氏の "Catalog der Coleopteren von Japan mit Angabe der bezuglichen Beschreibungen und der sicher bekannten Fundorte" (Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturkunde 40: 31-204) の中で (p.111) *Cetonia insperata* Lewis—Nagasaki としている。本種の産地を Nagasaki としているのは明らかな間違いと考えられる。引用の時のミスではないだろうか。

1894年 松村松年博士は "北海道産鞘翅類" を発表され (動物学雑誌 第6巻 第65号) その p.90 に 133 *Cetonia insperata* Lew. プンブンと云うのを記録されている。これが日本人による本種の記録の始めてであると思われる。勿論和名も始めて与えられたものであるが プンブンと云うのはいさかいただけない。

その翌年即ち 1895年に同博士は "Catalogue of Coleoptera collected in Hokkaido" なる報文を發表しておられる (動物学雑誌 第7巻、第86号)。

その p.57, 149 にこんどは *Cetonia submarmorea* Burm. 花, オウハナムグリを記録されていて前年の プンブンはふくまれていない。この間の関連に就いて何等説明されていないのでどの様な種を意

味しておられるのかははっきりしいなが多分*C. submarmorea* は*C. cataphracta* のことを意味しているのではと考えている。

1898年Reitter E.氏はBest,-Tab(38)(Verh.Natur.Forsch.Ver.Brünn)の47p.に*Pachnotosia insperata* Lewis をJapan を産地に記録しておられる。

1911年松村松年博士は“Erster Beitrag zur Insekten-Fauna von Sachalin”(Tohoku Imp.Univ. Jour, Coll. Agr.4(1):1-145, pl.1,2)なる報文のp. 119に*Cetonia insperata* Lew.ムラサキオオハナムグリKorakoff,Solowiyofka, gesammelt in 5 Exempharenと記録しておられる。

1921年のS.Schenkling 氏によるW.Junk Coleop. Cat . Paars.72,Scarabaeidae:Cetoninae の中ではp.222,*Liocola insperata* Lewis, Japan.ab.marmoratoides Reitt.となっている。

1923年新島善直・木下栄次郎両博士は“こがむしに関する研究報告(第二)”を公表になられその中で(p.168-169)ムラサキオオハナムグリ*Liocola insperata* Lewisを記載された。産地にNagasakiがあるが外国文献からの引用とすればSchönfeldt 氏のものからであろうが之は前に述べた様に間違いだと思われる。新たに両博士は石狩国産3exs.(性不明)を記録された。写真で全形は紹介されているが♂交尾器の図は入っていない。

1927年横山桐郎・鹿野忠雄両博士は“南樺太産甲虫類”を公表になられた(動物学雑誌 第39巻、第459号、p.1-39)。その中で(p.38)、212 *Liocola insperata* Lewis ムラサキオオハナムグリが収録されているが産地の記入は無く分布として樺太、北海道、九州となり本州が入っていない。

1935年加藤正世博士が発表になった“主要金亀子科の分類(4)”(昆虫界 第3巻、第18/19号:343-344)の中で*Liocola insperata* Lewis ムラサキオオハナムグリ(樺太、北海道、九州)は収録されているが同博士著の1933年の“分類原色日本昆虫図鑑、第八輯 鞘翅目”の中には図説されていない。

1939年出版の三輪勇四郎・中條道夫両博士著の“日本産鞘翅目分類目録 Pars.5 金亀子虫科”では(p.87)*Liocola insperata* Lewisムラサキオオハナムグリ(樺太、北海道)、ab.marmoratoides Reitter(日本)が収録されている

戦前本種の図説は平山修次郎氏の原色甲虫図譜(三省堂)(1940)と江崎悌三・安松京三両博士の“原色日本昆虫図説”の2巻だけの様に思われる(平山氏のものは北海道札幌産1♂, 26-VI-1939で*Liocola insperata* Lewis ムラサキオオハナムグリとなっている。図からすれば、*P. cataphracta* の様にも思われる。分布は樺太、北海道、九州となっている)。

1941年に八幡英夫氏は“日本産*Protaetia*属の種に就いて(I, II)”(昆虫 第15巻、第2号:75-84, 第15巻 第3号:114-126)なる論文を発表された。今迄のものを整理してまとめられたものであるが、この論文では当時の状況からして材料が不充分的点もあったのかこれで同定がはっきり出来ると云うことはまだ無理のように思われる(分布地は新しく次の地点が加えられた。北海道一層雲峽、

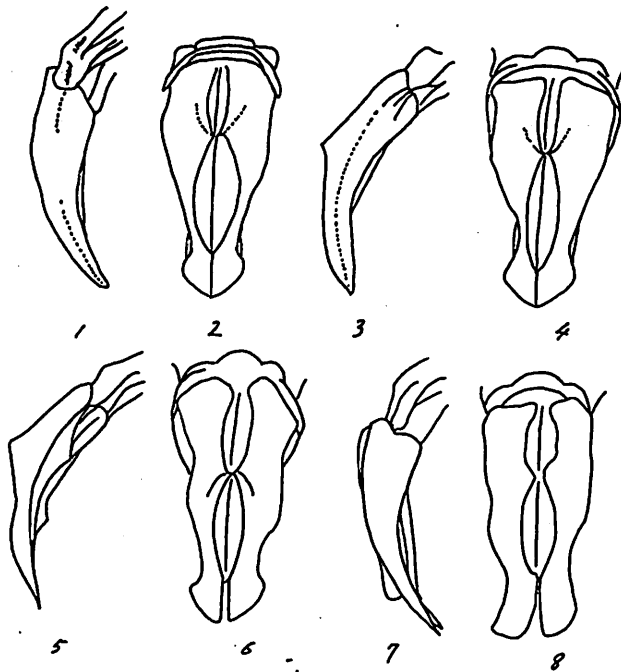
夕張、定山溪、樺太一豊原、突祖山、長野岩魚留、烏取大山)。

戦後になって1955年には伊賀正汎氏による“原色昆虫図鑑・甲虫編 増補改訂版(保育社)”にいち早く原色で図説された。ここで図説されているのは和歌山県高野山産(Ⅶ-1939)で*Protaetia insperata* ムラサキツヤハナムグリ、分布、北海道、本州、四国、樺太として示された。図が今一つはつきりしないのであるがどうも*P. cataphracta* の様に見える。

1959年に黒沢良彦博士はこの種はヨーロッパ大陸からアムール、北滿に迄分布している*P. lugubris* Herbst とその斑紋の特徴とか♂交尾器の形状などから区別することがむづかしいむね発表された(Bull. Nat. Sci. Mus. No. 44:339-340)。同時に本種は北海道では珍しくないが西日本あたりにいるものは*cataphracta* と中間的な特徴をもったものがあるとされている。

1960年野村 鎮氏は“List of the Japanese Scarabaeoidea(Coleoptera)”(Tōhō Gakuho No. 10:76)の中で*P. lugubris insperata*(Lewis) ミヤマオオハナムグリとされた。この和名は此処で始めてつけられたものでこの後この和名が用いられることになると思われる(分布は北海道、本州、四国、九州、樺太となっている。)

1964年Medvedev, S. N. 氏はFauan U. S. S. R. Sarabaeidae Vol. X, No. 5, Cetoniinae, Valginae を発表その中で*Potosia (Liocola) lugubris lugubris* はヨーロッパからウラル山脈をこえ西シベリア低地帯から東エニセイ川。東西サヤン山脈あたりまで分布していてそれより東ソビエト中央シベリアあたりから東サハリンまでと中国東北部に分布しているものを*P. (L.) lugubris orientalis* Medvedevと新亜種に記載しており*P. (L.) insperata*(Lewis)は日本に分布する種として独立種に扱っている(P. 181-186)。筆者はヨーロッパ産原亜種標本を有しないのでよくわからないが美しいカラー図説の“Iconographie Entomologique, Coléoptères, planche 6, Scarabaeoidea I(1978)”を見ると日本産のものとは外見では可成り違った印象を受けた(*Liocola lugubris* としている。八幡氏も樺太産は緑色型が多く北海道、本州のものには銅褐色型が多いと記しておられる)。またMedvedev氏は*lugubris*並びに*asp. orientalis*の♂交尾器を図説しているので日本産*insperata*と比較して見たら若干の相違はある様に思われた。したがってMedvedev氏の云う様に日本産は*P. insperata*として独立種扱いにしても良いのかもしれない。



Figs.1-8. Male aedeagus, lateral aspect and dorsal aspect.

- 1,2. *Protactia lugubris lugubris* (HRBST.)
 3,4. *Protactia lugubris orientalis* MEDVEDEV (MEDVEDEV, 1964)
 5,6. *Protactia lugubris insperata* (LEWIS)
 7,8. *Protactia cataphracta* ARROW

日本ではその後次の様に図鑑類に図説されている。1963. 野村 鎮、原色昆虫大図鑑 第2巻(甲虫編) (北隆館) (pl.68, f.7, p.135) ミヤマオオハナムグリ *P. lugubris insperata* 6-7月本州ではやや高地に産するとして分布として北海道、本州、四国、九州とされ樺太が入っていない。

1975. 林 長閑、学研中高生図鑑② 昆虫II [甲虫]。ミヤマオオハナムグリ *P. lugubris insperata* (p.76, 397)。分布。北海道、本州、四国、九州。

1984. 黒沢良彦、渡辺泰明、野外ハンドブック 12. 甲虫 (山と溪谷社)。ミヤマオオハナムグリ、北海道~九州。学名は無く各種に就いての解説は無いが非常にきれいな原色図で楽しませてくれる。

1985. 林 長閑。決定版 生物大図鑑 昆虫II 甲虫。ミヤマオオハナムグリ *P. lugubris* Herbst. 分布は北海道、本州、四国、九州となっている。

1985. 黒沢良彦。原色日本甲虫図鑑 (II) (pl.74, f.14, p.411)。基亜種はヨーロッパ産で日本およびサハリソ産は亜種 *P. l. insperata* に属し従来西日本産の本種と考えられていたものはすべて *P. cataphracta* ムラサキツヤハナムグリであるとされている。従って本種の分布は北海道、本州、サハリソとなっている。

以上の様な経緯で現在にいたっている。ヨーロッパとかシベリア、樺太産の多くの標本を見る必要

もあるし日本産の本種の標本にしてもそれ程多く見ていない現在、今一つはっきりしない点が多くある。

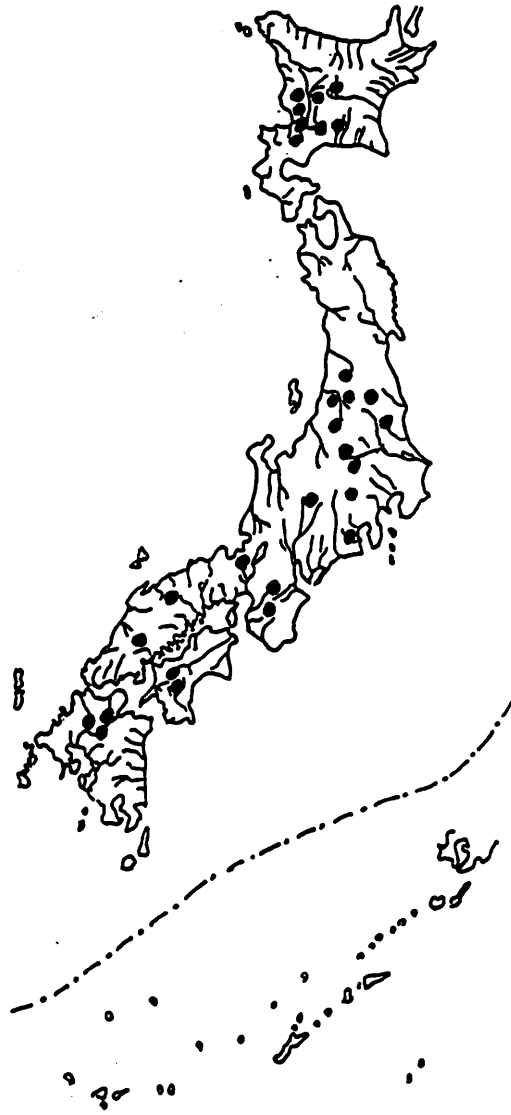
本種の従来の文献上からの分布をひろって見ると割りと西日本からのものもある。これらが正しく同定されているのかどうか（少なくとも♂であれば交尾器による区別はやや適確に出来そうであるが—）（筆者所有のミヤマオオハナムグリ2♂8♀、ムラサキツヤハナムグリ2♂6♀を比較した場合はまぎらわしいものは1頭も無く明らかに外観でそれとわかる位の違いはある。ムラサキツヤハナムグリの方が赤銅色と云うか紫色を呈してやや細長い。ミヤマオオハナムグリの方は暗銅色、赤銅色で少し方形と云うかがりしした形状をしている。尚文献上では見られなかったが筆者の所有ミヤマオオハナムグリの中には藤岡昌介氏の御好意で御恵与頂いた秋田県産の1♂1♀がある。1♂, Aki-nomiya Ogochi Akita Pref. 20-VI-1981, H. Kano leg. 1♀ Yuze Kazuno Akita Pref. F. Sato leg., 26-VII-1986）。

黒沢博士は従来西日本産と考えられていたミヤマオオハナムグリはムラサキツヤハナムグリであると述べられている（西日本産は暗銅色のものが多いと云うるのであるが、筆者はこの様なムラサキツヤハナムグリは見たことはない）、実際にはミヤマオオハナムグリはどのあたり迄分布している種なのであろうか、もっと詳しくそして多くの個体を調べて見なくてはいけない様に思われるがどんなものであろうか。本種の生活史の様なもの残念ながら見られなかった。ヨーロッパにいる*P. lugubris*の方の幼虫に就いてはMedvedev S.N氏の図説がある(1952)。

大変たよりないのであるが標本が見られない以上止む得ず一応手許にある文献から記録を拾って見た。尤も個人所有の文献からの収録であるから多くの重要な文献を脱落していることだと思われる。御教示御指摘を頂ければ幸いである。

ミヤマオオハナムグリの文献にあらわれた記録

北海道（松村松年、動物学雑誌、第6巻第65号：90, 1894）、Yezo (Lewis, Ann, Mag. nat. Hist. 5 (IV): 463, 1879., Cat. Col. Jap. Arch. London, P. 14, No. 1021, 1887)、石狩国（新島善直・木下榮次郎、北大演習林研究報告、II, 2, p. 168-169, 1923）、層雲峡・夕張・定山溪（八幡英夫、昆虫 15巻、2号: 83-84, 1941）、札幌（平山修次郎、原色甲虫図鑑、pl. 25, f. 4, p. 62, 1940）、白川、江差牛山（保田信紀、上川町の自然、p. 131, 1985）〔筆者所有標本の産地を参考までに加えておく。以下同じ。旭川、1♀、25-VII-1930、夕張、1♀、24-VI-1930、手稲、1♀、20-VII-1979、札幌、1♀、28-VII-1975、野幌、1♀、5-VII-1979、アポイ岳、日高、1♂、27-VII-1969〕。



ミヤマオホハムシの分布記録地矣

新潟県 Echigo: Kurokawa (中根 猛彦・馬場金太郎、市立長岡科学博物館々報、p.9, 1960)、湯
 沢町八木沢 (山屋茂人、長岡市立科学博物館研究報告 No.19:24, 1984)、飯豊山塊、胎内溪谷
 (馬場金太郎、飯豊山塊、胎内溪谷の生物：195-240, 1972)。

山形県 飯豊連峯丸森 (白畑孝太郎・黒沢良彦、飯豊連峯：205, 1970)。

秋田県 [Akinomiya Ogachi, 1♂, 20-VI-1981, Yuze Kazuno, 1♀, VII -1986]。

栃木県 [湯本、日光、1♀, 2-VII-1960] .

茨城県 [日置正義、るりぼし 1号: 3, 1973] .

福島県湯ノ花 (前田光弘・藤田 宏、月刊むしNo.15:20, 1972).

群馬県片品村建設平 (前田光弘・藤田 宏、I.C., No.15:20, 1972. 須田 享、群馬県動物誌、p.337, 1985), 武尊山 (須田 享、1985) .

山梨県日野春 (市川敏之、月刊むし No.12, p.33, 1972).

長野県岩魚留 (八幡英夫、I.C., p.84, 1941).

静岡県静岡市二軒小屋、富士宮市西白塚 (奥田宜生、静岡の甲虫 Vol.5, No.12:6, 1987).

京都府芦生演習林 (水野弘造、月刊むし、No.73:29, 1977).

奈良県野迫川村大股 (山本雅則、Sakaiensis Vol.16, No.2:142, 1979).

和歌山県日高郡竜神村 (後藤 伸、紀州昆虫、Vol.2, No.3:49, Vol.2, No.5:121, 1950)。高野山 (伊賀正汎著、原色日本昆虫図鑑、甲虫編、pl.32, f.703, p.102, 1955).

鳥取県伯耆大山 (八幡英夫、I.C., p.84, 1941).

広島県臥竜山 (小阪敏和ほか、広島虫の会々報、No.16:188, 1977).

愛媛県面河 (宮武陸夫・小林 尚、宝塚昆虫館報、No.73:2, 1950)。面河溪 (石原 保ほか、四国昆虫学会々報 Vol.3, Supp. p.70, 1953. 矢野俊郎、松山昆虫同好会時報 16号: 18, 1961)、石手川上流米野々演習林 (石原 保ほか、愛媛大学農学部演習林報告 No.12:157, 1975).

福岡県障子岳・深倉峽 (松田勝毅、北九州の昆虫、Vol.10:12, 1963. 高倉康男、生物福岡 18号: 28, 1978.) 英彦山北部山頂付近 (牛島靖雄、月刊むしNo.43:38, 1974. 高倉康男 I.C., P.28, 1978). 白岩山 (北九州の昆虫、30巻 3号: 172, 1984).

ムラサキツヤハナムグリ *Protaetia cataphracta* Arrow, 1913

G. J. Arrow氏によりN. Japan: Nikko, L. Junsai, Fusai, Usui Pass. 産標本で新種記載をされた (Ann. Mag. Nat. Hist, (8) IX, pp.405, 407, 1913) (その後1974年M. E. Bacchus 氏により次の様にタイプ指定が記録された。Lectotype ♂, Japan: Kurigahara, Usui Pass, in flowers, 5-VII-1881 (G. Lewis). Paralectotypes. Japan: 3♀, Junsai Lake (G. Lewis); 2♀, Kashiwagi, 15-24-VI. 1881 (G. Lewis); 1♀, Nikko (G. Lewis), 1♀, "Japan" - Bull. Brit. Mus. Entomol. Lond., Vol. 32, No. 2:28).

1921年のS. Schenkling氏によるW. Junk Coleop. Cat Pars. 72 の中では本種はPotosia (*Caloptosia*) *aerata* Erichson の異常型に扱われている。

1923年の新島善直・木下栄次郎博士による“こがねむしに関する研究報告(第二)”の中で*Liocolor brevitarsis*なる学名で(シラホシハナムグリの和名)のべられたものは*cataphracta* と *orientalis* を含んだもので図示された交尾器の図は*cataphracta* である(Taf. VII, fig. 14)。

即ち真の*cataphracta* がわからないので取りあげられず同時に*brevitarsis* も混同して取扱っておられたことになる。従って新島博士が担当解説された日本昆虫図鑑の*brevitarsis* も *cataphracta*, *orientalis* と混同されている。このことは戦前の知見では*cataphracta* の正体が今一つしっかり把握されていなかった様に思われる。図説も加藤正世博士がナガシラホシハナムグリ(仮称) *Liocola* sp. (東京世田谷で採集)とされたのがある位である(1933)。

同博士の1935年の“主要金亀子科の分類(4)”にも出てこないし1939年の三輪勇二郎・中篠道夫両博士の“日本産鞘翅目分類目録 Pars. 5. 金亀子虫科”にも出てこない。

1941年八幡英夫氏が“日本産 *Protaetia* 属の種に就いて(I)”の中で始めて詳しく解説され新しくムラサキツヤハナムグリなる和名を与えられて産地も岩手(森岡), 山形(新庄、米沢), 東京(九段、玉川), 長野(洗馬), 大阪(箕面、妙見、久安寺川), 鳥取(大山), 札幌(円山公園), 高松と多くを示され四国、北海道からは新記録とされた。

ただ氏は体型は*orientalis*に酷似するとされたのはいささか違う表現であり後黒沢博士が述べられた様に(1959)体型は*insperata* にやや似ている。

戦後になって1955年には伊賀正汎氏による原色図説があらわれた。図示されたものは大阪府能勢産(Ⅷ-1942)である。分布に北海道、本州、四国とされている。そして前にも一寸書いた様に黒沢博士は本種は*insperata* に比し低地性の種といえる。そして*insperata* と *lugubrisa* の交尾器とも特に相違がみとめられない。*orientalis*に似ると云うのではなく*insperata* によく似た種であるとされた(1959)。

1960年の野村 鎮氏の“日本産コガネムシ目録”の中には収録されている。分布は北海道、本州、佐渡、四国、九州となっている(佐渡の分布は中根・馬場両博士の記録によるものと考えられる、1960)。

1963年には“原色昆虫大図鑑 第2巻(甲虫編)”にて図説された(pl. 68, f. 6, p. 135)。分布は北海道、本州、四国、九州で1960年の佐渡島は省かれている(中根、馬場両博士の記録は学名の扱いも若干奇異に思われるし詳しいデータも無い。佐渡の記録は之だけであるから今一つはっきりするまで保留しておく方が良いのかもしれない)。

Medvedev, S. N. の *Fauna U. S. S. R. Scarabaeidae Vol. X, No. 5* には日本特産と云うこともあつてか収録されていない。

その後日本で本種を図説されたものは次の様にある。本種は日本特産種で余り普通に見られないこ

ともあってか学名に就いての混同はほとんどなかったようである。ただ正体ははっきりしなかったことから記録が戦前では数える程しか現れていない。

図説。1975, 林 長閑, 学研中高生図鑑 2 昆虫Ⅱ [甲虫] (p.76,405)。1984,, 黒沢良彦・渡辺泰明、野外ハンドブック。12. 甲虫 (山と溪谷社) (p.187)。1985, 林 長閑編 決定版生物大図鑑 昆虫Ⅱ甲虫(p.94 ~95)。1985, 黒沢良彦 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)(pl.74, f.15, p.411)(此処で分布に屋久島が加わっている。)

一応今迄の文献上に現れた本種を府県別にまとめて見ることにする。手許にあるものみの収録であるから重要な文献で脱落しているものが数多くあるのではないかと気がかかる。御教示頂ければ幸いである。

これで御覧のごとく本種の方は日本には広く分布している様であるが、ただごく普通に見られる種ではなく、やや少ない種に属する様である。一般に注意が拂はれていない点も影響しているとも思われる。残念なことに生活史に関しては全くわかっていないのが現状である。こちらも早く解明しなければ絶滅になる恐れがある(最近庄田達巳氏は横浜市緑区荏田でオサムシ類の冬期採集の際、土中より3、4日に3♂4♀の本種を採集していると、個体はすべて新鮮であったとの大変貴重な報告をしておられる、1985)。

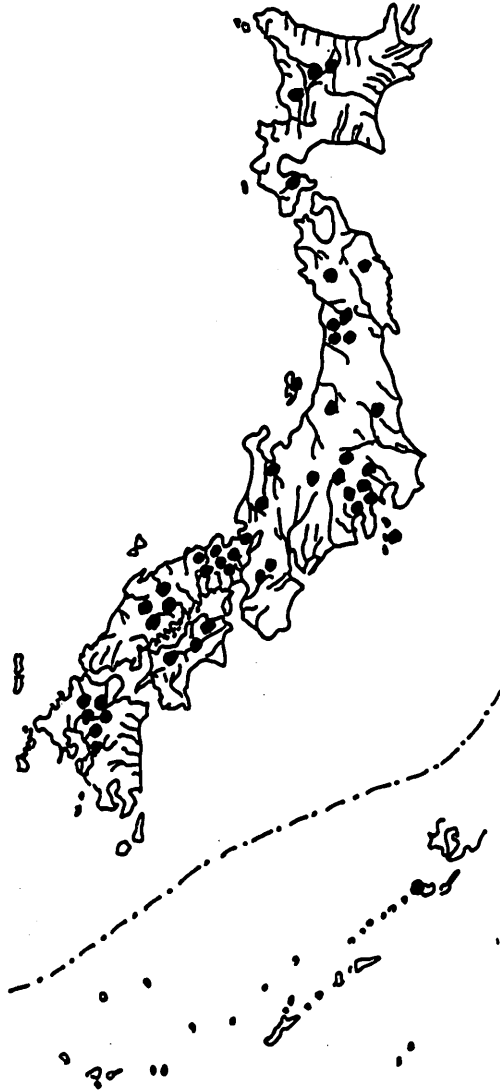
日本特産のハナムグリのようであるから何時迄も生きつづけてほしいものである。

ムラサキツヤハナムグリの文献にあらわれた記録

北海道尊菜沼(Arrow, Ann, Mag, Nat, Hist. (8) IX:405, 1913. Bacchus, Bull. Brit, Mus. Entomol. Lond., Vol.32, No.2:28, 1974). 越路・上川町(保田信紀, 上川町の自然:131, 1985). 札幌(円山公園)(八幡英夫, 昆虫 Vol.15, No.2:83, 1941)[旭川, 1♀, 25-VII -1937]。

秋田県山本郡峰村 [1♀, 20-VII-1986, F.Sato ;leg.]。

岩手県盛岡(八幡英夫, I.C., p83, 1941)。



ムラサキツヤハナムグリの国内記録地集

山形県新庄・米沢(八幡英夫, I.C., p83, 1941), 朝日岳鉱泉(板垣輝彦, 新昆虫 9巻5号: 12-15, 1956), 朝日岳(朝日鉱泉), 吾妻山(滑川)(板垣輝彦, 山形昆虫同好会々誌 2巻1号: 6, 1964), 烏海山方草滝(櫻井俊一, 昆虫と自然 16巻14号: 12, 1981)。

新潟県佐渡島: Umezu, Otowa-ike (中根猛彦・馬場金太郎, 市立長岡科学博物館々報 No.4:9, 1960).

この記録は *insperata* の亜種 *cataphracta* となっている。この様な表現を使用されているのはこの記録だけのようである)。湯沢町八木沢(山尾茂人, 長岡市立科学博物館研究報告 19号:24,1984)。

茨城県(日置正義, るりぼし No.1:3,1973)。

栃木県, Nikko(Arrow, I.C., p.405, 1913. Bacchus, I.C., p.28, 1974)。

東京都世田谷(加藤正世, 分類原色日本昆虫図鑑, 第八輯, pl.16, f.12, *Liocola* sp.となっているが図から本種と判定出来る), 九段, 玉川(八幡英夫 I.C., p.83, 1941), 城山(北川太一, 昆虫界 9巻, 91号:655, 1941), 高尾山(市川敏之, 月刊むし 9:31, 1971)。御蔵島(澤田玄正・渡辺泰明, 農学集報 14巻 1号:25, 1969。平沢伴明, 月刊むし No.152:37, 1983。石田正明, 東京経済大学自然科学論集 63号:149, 1983。I.C., 68号:1984)。

群馬県栗ヶ原, 碓氷峠(Arrow, I.C., p.405, 1913. Bacchus, I.C., p.28, 1974)。片品村建設平(須田享, 群馬県動物誌:337, 1985)。

神奈川県逗子市神武寺, 葉山町長柄, 横須賀市田浦町(大場信義ほか, Sci, Rep. Yokosuka City Mus. 28:49, 1981)。横浜市緑区荏田(庄田達巳, LAMELLICORNIA, No.1:54, 1985)。

埼玉県芦ヶ久保(市川敏之, 月刊むし 9号:31, 1971)。

山梨県日野春穴山方面(市川敏之, 月刊むし 12号:32-33, 1972)。

長野県洗馬(八幡英夫, I.C., p.83, 1941)。

富山県高岡市[1♂, 22-VI-1946, Ishida leg.]

福井県大野市刈込池・小池(佐々治寛之・斎藤昌弘, 福井県昆虫目録:122, 1985)。

京都府北桑田郡美山町芦生(水野弘造, 月刊むし73号:29, 1977。春沢圭太郎 LAMELLICORNIA No.1:31-35, 1985)。岩倉(谷 寿一 Microcosm Vol. VI:8, 1979)。

大阪府箕面山(八幡英夫, I.C., p.83, 1941。後藤光男, 箕面山の動物相調査:176, 1965。同改定版:143, 1967)。妙見・久安寺川(八幡英夫, I.C., p.83, 1941)。能勢(伊賀正汎, I.C., pl.32, f.704, p.102, 1955)。

箕面市止々呂美, 西之所, 東能勢村吉川峠, 吉川下, 初谷, 青具山附近, 高代寺道(仲田元亮, 能勢の昆虫(甲虫), 1970, 1978, 1982, 自刊)。箕面市西ノ所, 豊能町初谷, 余野[中田隆昭, Crude No.30:16, 1987)。

奈良県柏木(Kashiwagi)(Arrow, I.C., p.405, 1913. Bacchus, I.C., p.28, 1974)。野迫川村伯母子岳[山本雅則, Sakaiensis 16巻2号:142, 1979)。

兵庫県川辺郡東谷村妙見山西方(今西芳之, 関西昆虫雑誌 Vol.5:24, 1938)。猪名川町木間生, 内馬場, 上阿古谷, 川西市一庫~猪名川町民田, 横地, 笹部, 若宮(中田元亮, I.C., 1978, 1982)。笹部[1♂, 28-VII-1959, T. Takahashi leg.]。神戸市六甲山[1♀, 16-VII-1938, T. Takahashi leg.]。

宍粟郡音水[2 ♀, 20-VII-1969, T. Takahashi leg.]。出石郡出石町内田[高橋 匡, VITA No.1, 1964. IRATSUME No.5, 1981]。美方郡湯村[1 ♀, 27-VII-1952, T. Takahashi leg.]。

鳥取県伯耆大山(八幡英夫, I.C., p.83, 1941)。

岡山県真庭郡八束村上長田字田(桂 孝次郎他, 蒜山の生物調査報告: 158, 1973), 県北部(倉敷昆虫同好会, 岡山県の昆虫, p.129, 1978)。

広島県帝釈峡, 十方山(小阪敏和ほか, 広島虫の会々報 No.16:188, 1977), 神石郡高蓋, 高光(秋山美文, 広島虫の会々報 No.25:51, 1986)。

香川県高松(八幡英夫, I.C., p.83, 1941. 矢野俊郎, 松山昆虫同好会時報 No.16:18, 1961)。

愛媛県面河溪(石原 保ほか, 四国昆虫学会々報告 Vol.3, Suppl.p.70, 1953. 矢野俊郎, I.C., p.18, 1961)。

徳島県那賀郡沢谷村上沼谷, 麻植郡木屋根平村川井峠(三宅義一ほか, 昆虫科学 No.7:31, 1958. 矢野俊郎, I.C., p.18, 1961)。

福岡県祖母山嶽(三宅義一, 北九州の昆虫 Vol.4, No.1:27-28, 1957), 英彦山(神谷寛之, 彦山昆虫目録Ⅱ, 鞘翅目: 25, 1959. 高倉康男, 生物福岡 No.1:7-11, 1961. I.C., No.18:28, 1978). 障子岳・深倉峽(高倉康男, I.C., p.28, 1978)。白岩山・本屋敷・国見峠(山脇好之, 北九州の昆虫, Vol.30, No.3:172, 1984)。

熊本県阿蘇郡南小国村市原(平野幸彦, 新昆虫, Vol.9, No.12:48, 1956. 大塚 勲, 北九州の昆虫 Vol.9, No.2:18, 1962)。熊本市立田山, 球磨郡水上村(大塚 勲, I.C., p.28, 1962)。

鹿児島県屋久島(中根猛彦, 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書: 609, 1982)。

(JULY • 1987)